



日本大学 生産工学部 建築工学科

南 龍平

最近、日本人の住まいへの関心が高まってきた様に思う。リフォーム番組や雑誌のおしゃれ部屋特集。デザイナーズマンションは入居希望者が順番待ちだと言う。しかしそんな「こだわりのある暮らし」なんてできる人が、果たしてどれだけいるのだろう。憧れるだけの「良いケンチク」なんてやめて、もっと日本の気候や風土、暮らしに沿う様な、気さくな集合住宅を提案したい。敷地は秋葉原。神田川と大通りに挟まれた 230m の細長い土地に SOHO 型集合住宅を計画する。あえて切り離して配置した“いえ”と“仕事場”を、素足で歩き回れる長い長いエンガワでつなぎ直す。通り側にも生活感が溢れ出し、川沿いに遺されてきた下町の記憶を留めながら、偶発的なコミュニケーションの発生する場となる。



講 評

作者が最も東京らしい場所として選んだ敷地は、神田川と大通りに挟まれ細長く、レベル差もあり、相当の設計力を要する場である。にもかかわらず、適切なスケール感を持って、都市とのかかわりや職住の関係をまとめ上げている手腕は、早い段階からの実務での活躍を予感させる。視点を変えれば、相当高い評価も成立つ。スケッチやインテリア模型の人物点景などにも、器用さとセンスのよさが伺える。今後の設計活動においては、デジタル手法とともに、手を動かすスタディ+表現手法を君独自の武器として磨いて欲しい。

新しい SOHO の提案としては、「いえ」と「仕事場」の間に「エンガワ」を挿入することで、多くの提案を導き出している。例えば、川側と通り側の双方に表情をつくれる「仕事場」と「いえ」のグループを上下に分けることで、エンガワにコミュニケーションのヒエラルキーがつけられる、など。そうしたなかで物干し場は、電車からの視線を竹の植栽で隠す工夫はあるものの、パブリックとプライベートの兼ね合いを考えるうえでの象徴的な要素として、今後も継続すべき研究課題であろう。

[審査員 柳瀬寛夫]